

## 滋賀大教育学部付属幼稚園が園庭に

# 「琵琶湖の土」で ビオトープ造成



滋賀大教育学部付属幼稚園(大津市昭和町)が、「琵琶湖の土」を活用したビオトープを園庭に造り、園児たちは日々、植物や虫などの生き物に触れている。生態系への興味が高まり、命について考えるきっかけになっている。

●ビオトープで生き物を観察する園児たち(大津市昭和町・滋賀大教育学部付属幼稚園) ●ビオトープに自生したというオモダカ



ビオトープはSDGs(持続可能な開発目標)を通じた幼児教育の一環で、2023年秋に整備した。今春卒園した当時の4歳児が穴掘りや土運びを手伝い、保護者が直径約4メートルの池を造り、遮水シートを敷いた。完成時は土に園庭や市販の砂を使っていたが、しばらくたっても濁った水たまりのままだった。水生植物公園みずの森(草津市)に相談すると、土に栄養分が少ないためとの指摘を受けた。

## オモダカ自生 園児、生き物に興味

昨春、琵琶湖の水から水道水を生成する際に出る土と水草の堆肥と混ぜた「びわ湖産の土」を大津市企業局から譲り受け、水底に敷いた。そうすると、春に植えたスイレンが夏に開花し、オタマジャクシが息づくようになった。水草のオモダカも自生するようになった。

毎日、園児らは池の周りに集まり植物や生き物を観察している。池に浮いていたトノサマガエルの死骸が骨だけになった様子からカエルの一生を思いをほせたり、途絶えた命が別の命を生かしていると考えたりと、想像力を働かせる機会になっているという。

皇月彰士ちゃん(5)は「どんな風に生きているか考えるようになった」と楽しむ。大矢明副園長(54)は「子どもたちの感性を豊かにしていきたい」と話した。(薄田和彦)



琵琶湖から水を汲み上げる過程でできた「びわ湖産の土」からはたくさんの微生物が生まれその力でビオトープの水はいつも澄んでいます。

水は園舎に据え付けている雨水タンクからパイプを引いてウッドデッキの下にある貯水タンクにためています。水が少なくなると子供たちが手押しポンプを動かして水を汲み上げます。

初夏のビオトープにはスイレンが咲き始めました。カエルの卵からはオタマジャクシがふ化し、泳ぎ回っています。卵からふ化する様子を保育室でも見たいと考えて飼育ケースで観察していた子供たちでしたが、卵からオタマジャクシがふ化してしばらく立ったある日、ケースの水替えをするためにビオトープをのぞいて一言、「でっかー!」。飼育ケースのオタマジャクシよりも1.3倍は大きいであろうビオトープのオタマジャクシを見てびっくりしたのでした。

「同じ日に生まれたのになんでこんなに違うんだろう」「たくさん泳げるからかな」「住み心地がいいのかも…」「あ、そうや、去年の大きい組さんが『ビオトープの水はすごいねんぞ』って言ってたわ!」子供たちは日々の暮らしの中で、たくさんの自然に出会い不思議を感じ、想像を広げています。

保護者の皆様に手伝っていただき、子供たちと共に作ってから1年半。成長したビオトープはようやく『自然界』に認めてもらえたような気がします。これからも大切に育てていきたいと思います。